

読書

いにがたの
一冊

四十年近く前になるが、わが和泉屋養鯉場で錦鯉作りを一から修行した尾形氏がこのほど「泳ぐ宝石 錦鯉」を上梓した。

尾形氏は修行中、山古志郷が錦鯉を産んだその背景をたずね、自ら地域社会に溶け込んで人々との交わり

尾形 学著

を深めた。そのような日々のなかで「作出とは、こだわりの演出であって、人は、常に頭を低く、目は高く、心おだやかにあるべし」という師の教えを身をもって覚えた。そして、それを作出の礎とし、現在、



泳ぐ宝石 錦鯉

九州の久留米市で大規模な養鯉場を経営し、本県の生産者ともども、錦鯉を大々的に海外に輸出して、世界の人々に日本美を普及している。

錦鯉の原点は魚野川に生息する真鯉で、この流域で生活する旧上田郷の人々が

浅黄と称する変わり鯉を作出した。一方、旧山古志郷では突然変異で真鯉から緋鯉が生じ、その血筋を浅黄に重ねるなどしながら、明治中期に紅白の前身である更紗を創出し、その後もメンドルの法則を活用して百種に余る品種を今日にもたらししている。

錦鯉が環境適応して特殊な形態を獲得する自然現象は、どの地域でも起こったはずだが、これを芸術的な

根差した人間社会の文化水準や経済状況などが絡んでくるが、錦鯉は名だたる豪雪地帯の人々の慰みとして、天にも届かんばかりに開墾された水田用の堤を揺りかごとして育まれた。

錦鯉は大正三年の東京上野の不忍池で開催された大正博覧会で「越後の変わり鯉」の名で正式に県外デビューを果たしたが、昭和初期に北越新聞の廣井一社長が二十郷二於ケル色鯉ノ

観賞魚に作り上げたのは、ひとり中越の山間の農民たちだけであつた。

「およそ特殊な産物が育つのは、地域風土に戦後のことである。本書は「錦鯉に生涯を捧げた鯉師のこころ」と題し

郷土の先達が誇る文化紹介

て、私の祖父の間野一郎語録を付章に掲載している点が特徴である。さらにDVDも付いていて、錦鯉について鑑賞のポイント、飼育の方法なども分かりやすい。県内の主な生産者が得意とする各品種の紹介がなされ、併せて錦鯉年表が添えられているので、過去二百余年の越後人が誇るべき錦鯉の歩んできた道がよく見える。

わが郷土の先達たちの千の手、万の手が、「農民芸術」として本県の重要物産品に作り上げてきたが、錦鯉はいまや世界の隅々にまで知られるユニバーサルな文化に昇華している。

間野 泉一

(全日本錦鯉振興会理事長)
■新日本教育図書(23000円)